

装丁——レフ・デザイン工房 神田程史

*カバー写真||米国立公文書館所蔵のGHQ民間情報教育局(CIE)文書に含まれているWGIP関連の原史料で、一九四八年二月八日のWar Guilt Information Programを主題としたメモ。

序 章 在外文書調査研究の旅へ

初心の場所へ

二〇一二年十二月、凍りつくような寒さの中、ニューヨークの空港からヴァッサー大学へと車を走らせた。三十年ぶりの在米文書研究に胸は躍っていた。ヴァッサー大学はハドソン川のほとり、ニューヨーク市の七十五マイル北に位置する名門大学で、美しいキャンパスが印象的であった。

まずホテルにチェックインし、直ちに図書館へと向かった。特別コレクション図書館の地下一階に所蔵されている『菊と刀』の著者、ルース・ベネディクトの文書を研究するためである。二時間ほど待たされた後に研究者登録の手続きをし、注文した二つのフォルダーを図書館員が手渡してくれた。

研究者一人に一フォルダーを手渡すという規則だが、幸い妻も研究者として登録することができ、二倍の速度で史料を読むことができた。英文科出身で卒業論文を英語で書き、専門学校やYMCAで英語を教えた経験もある妻は力強い「助っ人」であった。

一九八〇年、私はアメリカに保存されているGHQ（連合国軍総司令部）の文書を研究することによって、日本の戦後史（教育）を見直すという志を立て、三年間渡米した。

アメリカの陸軍・海軍の文書が二十五年、三十年後に公開されると当時の日本の全国紙が一斉に一面トップ記事で大きく報道したことが契機となり、この文書を研究調査することにより、戦後教育によって日本人が失ったもの、得たものは何かを解明したいと思ったからである。

その文書はワシントンDCの郊外にある国立公文書館の別館に保存されていた。GHQ文書は一万二千八百八十三箱に及ぶ膨大な量で、これは一生かかっても無理だと茫然自失した研究初日の衝撃を、一生忘れることができない。

しかし、占領下の日本で教育や宗教分野の改革を担当したCIE（民間情報教育局）の史料はそのうちの九百十七箱で、約二百四十万頁であることが分かり、これなら一生かければ研究できると希望が湧いてきた。ところが、もう一つ大きな壁があることが分かった。それは、年間百枚しかコピーが許可されないという規則であった。

GHQ文書は整理されないまま、担当官の名前を付したファイルが雑然と並んでいる状態であったため、片っ端から読み、大事だと思ふ史料を手書きのメモに残すという気の遠くなるような作業を続けたが、私が発見したい史料はなかなか見つからなかった。その間に私が筆写したメモは段ボール十箱を超える膨大なもので、帰国後、学生に見せたら、「これは先生にしかできませんね」とびっくり仰天していた。

腹を決めた最後の半年間に次々と重要な史料を発見したが、それまでは悶々とした日々が続いた。メリーランド州立大学マッケルデイン図書館のブランゲ・コレクシオン（占領軍の検閲史料）について江藤淳氏に知らせると、江藤氏はワシントンにやって来られ、あつという間に『戦艦大和ノ最期』の検閲史料を発見され、「護国の英霊に導かれた」という感動的な学会発表をされた。

アメリカで開催された学会で誇らしく発表された江藤氏の姿はひととき輝きを放っているように感じられたが、それに比べて、知らせた本人である私の研究は一向に進まない。そのあまりのギャップに打ちひしがれた。

そんなとき、私を支えてくれたのは、大学でふと目にした次の三枚のポスターであった。

1 “Dream what you dare to dream. Go where you want to go. Be what you want to be. LIVE!”

「あえて夢見ようと思うことを夢見よ。行きたい所に行け。なりたいものになれ。真に生きよ」

2 “You are never given a wish without also being given the power to make it true. You may have to work for it, however.”

「願いを実現する力を与えられないで、願いを与えられるということはない。しかし、そのためには努力しなければならない」

3 “There is invisible summer in your heart in the middle of winter.”
「冬の真つ只中にあなたの心の中に目に見えない夏がある」

私が最も発見したかったのは、米大統領ルーズベルトが「敵国の哲学そのものを破碎する」と声明した対日占領政策の核となった一九四五年十二月十五日の「神道指令」関係文書であった。同文書はなかなか見つからなかったので一時帰国した。神道思想家の葦津珍彦氏によれば、CIE宗教課の一員であったウィリアム・ウッダードの研究を支援していた米クレモント大学に史料が保存されているのではないかということであったが、同大学には保存されていなかった。

その史料は米国立公文書館別館のCIE文書の中にあつた。右上に一九四五年十二月十五日と明記された文書が発見したとき、涙があふれて止まらなかった。志を立てて渡米してから、三年近い月日が過ぎていた。この日のために、この日のためにあきらめずに苦しい日々を乗り越えてきた。「史朗、大丈夫。必ずよくなる」と何度も語ってくれた父の言葉を肝に銘じて頑張ってきた。それから次々と重要史料を発見できたことは不思議な体験であった。

あれから三十年、ニューヨークで在米文書を目にしたとき、そんな過去の出来事が走馬灯のように脳裏をめぐった。三十年間遠回りをしてきたが、やっと帰ってきたんだなと感慨深かった。父が「お帰り」と言っているような気がした。そう感じたのには訳がある。

占領史研究のためにアメリカに留学する決意を父に伝えたとき、「史朗という名前は歴史を明らかにしてほしいという私の切なる願いから名づけたものだ」と涙ながらに語った父の言葉を私は生涯忘れることができない。「歴史を明らかにしてほしい」という父の切なる願いに私は一体どれだけ応えてきただろうかと思うと、涙が止まらなかった。今こそ「初心」に戻る秋だと心の底から思った。

私の中には研究者魂と活動家魂が共存しており、前述した全国紙の一斉報道が私の研究者魂に火をつけて三十歳で渡米したが、帰国後、政府の臨時教育審議会の最年少の専門委員（当時三十四歳。私のほかに三十代、四十代は皆無で、「新進気鋭の教育学者」とマスコミからもてはやされて有頂天になっていたのか、父から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という一句がハガキで送られてきた）となり、毎週三週間、近く教育改革論議に参画し、私の活動家魂に火がついた。

以来、松下政経塾の講師・入塾審査員（志）審査を担当、文部省の国際学校研究委員、自治省の青少年健全育成調査研究委員会座長、政府の少子化対策重点戦略検討会議の分科会委員、埼玉県教育委員長、「新しい歴史教科書をつくる会」副会長、やすくに活世塾塾長、師範塾・

親学推進協会理事長、内閣府の男女共同参画会議議員（三期六年）、東京都の男女平等参画審議会委員（三期六年）、埼玉県の青少年健全育成審議会会長（二期四年）、神奈川県の不適応対策研究協議会の専門部会長、荒川区の男女共同参画社会懇談会の副会長、仙台市の男女共同参画推進審議会委員などを歴任してきた。

この三十年間、活動第一で戦後教育史研究を疎かにしてきたが、二〇一二年十一月二十日に六十二歳の誕生日を迎えて、「初心」に戻る決意をした。十一月十日に東商ホールで開催された靖国神社崇敬奉賛会主催の公開シンポジウムで京都大学名誉教授の中西輝政氏と対談したことが、ルース・ベネディクトの『菊と刀』に注目する契機となった。

また、三十年前の時点では公開されていなかった機密文書が新たに公開され、さらに、当時葦津珍彦氏や岸本英夫氏（終戦当時、東京大学助教授でCIE宗教課のアドバイザーを務めた人物）のご子息に尋ねてもどうしても発見できなかった岸本英夫日記やウッダード文書がオレゴン大学で発見されたことは、私の研究者魂に火をつけた。

すべての役職を辞して講演活動も必要最低限に自粛し、研究執筆に専念する決意を年賀状に書いたところ、「新しい歴史教科書をつくる会」を私と藤岡信勝氏と三人が中心になって設立した西尾幹二氏から、次のような賀状が届いた。

「賀状拝読、ライフワークに立ち上がったとの報、私は大変喜んでいます。もう昔ですが、

このテーマで大著を書いてくださいと申しました。実現しそうですね。うれしいです。そうではなくちやあなりませんね。もう十分に『行動』はなさったので、『認識』の集大成の秋です。待っていますよ」

私の父も同じ思いではないかと思った。

複眼的研究の誓い

二〇一三年二月二十五日、午後三時成田空港発の飛行機でニューヨークのジョン・F・ケネディ空港へ向かう。日本との時差は十四時間。十二時間かかって到着。四時間半後、一路ロンドンのヒースロー空港へ向かう。ニューヨークとロンドンの時差は五時間。七時間かかって午前六時二十分に到着。両便で二度ずつ機内食。合計十九時間という長い飛行と時差のため、だんだん朝食なのか昼食なのか、分からなくなる。

ヒースロー空港からコーチ（長距離バス）で南へ約三時間走って、十八世紀末にジョージ四世が離宮として建設したロイヤル・パヴィリオンのある美しい海に面したブライトンに到着。青く輝く海を眺めながら、海岸沿いにホテルがびつしりと軒を並べている通りを重い荷物を引きずりながら歩くこと四十分。地図上では徒歩十分くらいと判断してタクシーに乗らなかったが、ホテルに到着したときには長旅の疲れがピーク状態。

しかし、サセックス大学図書館の特別コレクション所蔵のジェフリー・ゴラー文書の調査ができるのは午後五時までのため、昼食もとらずに、チェックイン後、直ちにタクシーで大学に向かう。「こんな無茶なことは今しかできないね」と、同行した妻に思わず本音がポ

ロリ。サセックス大学は美しいキャンパスと学際教育が特徴の名門大学で、三名のノーベル賞受賞者と大統領、副首相、農村大臣、保健大臣を輩出している。

日本からあらかじめ調査したい史料を準備していただくようメールで依頼していたため、特別コレクション担当の図書館員が史料箱を準備して待機してくれていた。まず受付で入館手続きを済ませ、図書館員に案内されて二階の史料閲覧室へ移動し、規則についての説明を受ける。フラッシュを使わないカメラ撮影は可能で、スキャナーで取った画像は一日五十画像までUSBメモリーに入れることができるが、コピーはできないという。

まず閲覧室内のパソコンでゴーラ、二書全体の検索を行うとともに、一九九三年に作成されたカタログに目を通すが、史料の膨大さに思わず嘆息。三十年前に初めて渡米し、ワシントンDC郊外の国立公文書館別館に保存されていたGHQ文書一万二百八十三箱を初めて目にしたときの衝撃が脳裏をよぎる。

思い直して妻と打ち合わせをして作業の分担をした。一回に手渡される史料ボックスは一人に一箱。私が史料の重要性をチェックして、妻が片っ端から筆写するという二人三脚の研究調査が始まった。

サセックス大学での調査によって、ルース・ベネディクトの『菊と刀』の土台となったゴーラーの論文の基礎史料である聞き取り調査史料（驚くべき人物が含まれていた）や参考文献

関係者との往復書簡などが明らかになった。

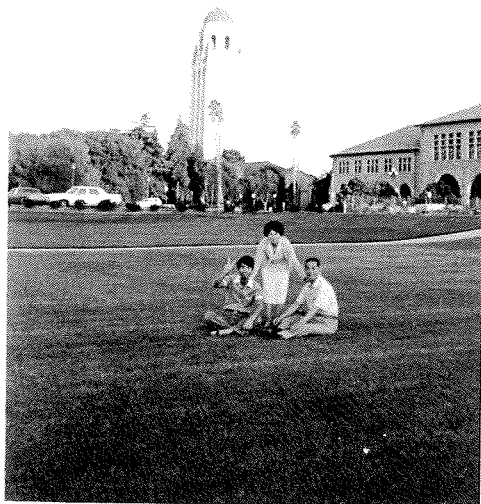
三月四日昼、ヒースロー空港発の飛行機で、六時間かけてニューヨークへ移動。さらにエアシャトルと地下鉄とトレインを乗り継いで、四時間後にヴァッサー大学に到着。重い荷物を持つて長時間移動するハードスケジュールに肩はパンパン。ニューヨークでは同日から、国連女性の地位委員会が「女性と少女に対するあらゆる形態の暴力の予防と根絶」をテーマに開催。

ヴァッサー大学のベネディクト文書はカメラ撮影が許可され、複写手続きもできるので、複写する必要があるかを私がチェックして、妻が用紙にフォルダー番号と文書名、日付を書きながら、必要に応じてカメラで撮影。『菊と刀』執筆以前のベネディクトとゴーラーの往復書簡やベネディクトの対日占領政策にかかわった活動を中心に調査。

三月五日、皇太子殿下がニューヨークに到着され、国連本部で開催されたレセプションで国連幹部、各国の国連大使らと懇談。翌六日、国連本部で開かれた「水と災害に関する特別会合」で素晴らしい基調講演をされ、感激。埼玉県で全国高校総体が開催された際、皇太子殿下主催の会食（出席者は十名程度）に県教育委員長としてお招きいただいたことや、その後宮中茶会に招待されたときにも名前を覚えていくくださり、お声をかけていただいたことがなつかしく思い出された。

三月八日、国連本部で開催された「国連女性の日」会議に出席。世界各国の政府代表のほかに非政府組織（NGO）の代表らが結集。私もメンバーになっている、政府の「男女共同参画会議」のテーマにも関連するので、議論の動向をチェックした。

三月十日早朝六時五十五分、ニューヨークからソルトレイクシティを経由してオレゴン州のユージン空港へ向かう。出発直前、三月十日よりサマータイムに移行するため時計を一時



1981年、スタンフォード大学フーバー研究所前で両親と

間早めないといけないことに気づき、間一髪セーフ。四時に目覚め、たまたま前日のニューヨークの新聞を読んでいる、その記事を発見。ご先祖様の目に見えない導きに感謝。九時間半かかってユージンに到着。

ホテルにチェックイン後、オレゴン大学のキャンパスを下見。半袖のTシャツ姿の学生が多く、前日雪の降った極寒のニューヨークから厚手のコートを着込んで歩いている私たち二人の

服装とのギャップに驚く。三十年前、雪がしんと降っているワシントンDCから車でアメリカ大陸を横断し、一日約八時間運転し、一週間かかってサンフランシスコを経てスタンフォード大学に到着したときの衝撃を思い出した。キャンパスの随所に美しく咲き誇る花が見られる。五分咲きの桜に春の到来が感じられ、日本より一足先に桜の開花を味わわせていただいた。

三月十一日、東日本震災二周年に合掌しつつ、オレゴン大学のナイト図書館でウッダード文書の調査研究に着手。三十年前、どうしても入手できなかった岸本英夫日記と、生々しい神道指令と天皇の「人間宣言」の草案および関係文書（発見）、感激。思わず一気に読破。神道指令（靖国神社問題を含む）、天皇の「人間宣言」、教育勅語、修身・歴史教科書等の使用停止に関する緊迫したGHQとの交渉過程が簡潔に記されていて、極めて貴重な第一次史料。三十代のころ、二年半かかって発見した神道指令草案。そのより詳細な史料を発見して、自らに与えられた使命を全うするために、このナイト図書館に来るように導かれたのだと気づいた。「精神的武装解除」という占領政策の中核となった神道指令（ならびに教育勅語の廃止・修身・歴史教科書の使用停止）の不当性を明らかにすることが、父が「歴史を明らかにしてほしい」と切に願って「史朗」と名づけた私の歴史的使命に違いない。その使命を全うするために、再び占領文書研究に導かれたのではないか。

三月十四日、再びニューヨークに戻り、十三日付のニューヨーク・タイムズ紙で写真入りで紹介された映画「エンペラー」を市内の映画館で鑑賞。トミー・ジョーンズが演じるマッカーサーと昭和天皇の第一回会談の内容が大きくクローズアップされて幕を閉じる感動的な映画。三月十七日、アムトラックで一時間半かかってフィラデルフィアに移動。ペンシルベニア大学を経由して、タクシーで三十分かかってスワースモア大学近くのホテルにチェックイン。同大学の下見をするために徒歩でホテルを出発。途中ですれ違った女性に道を尋ねると、「歩いていくのは無茶だ」と必死の形相で猛反対。親身になって両手を取って懸命に説得する姿に感動。下見を断念してホテルに戻る。そのときのことを妻が詩にした。

歩いていくのには遠すぎると心から心配してくれた異国のあなた

「心配しないで」と言うと、間髪容れずに

「いいえ、あなたたちのことを心配するわ」と

この先を歩いていこうとする私たちを

頭を抱えんばかりに心配してくれたあなた

あなたの心に接して良かった

心あたたかく 涙が出そう

あわただしい研究調査旅行の中で、思わぬ出会いにホッとさせられることも少なくない。ホテルの部屋に案内してくれた日本人ハウスキーパーとの出会いもその一つ。妻がこの日、二つ目の詩を書いた。

日本から遠く離れたアメリカ東部の地で元気よく

走り回るようにして働いているあなた

あなたの姿に接し、数分の会話をして

心にしみじみと感じ入るものがある

どうかお元気で

数分間の会話なのに、お互いに涙ぐんでいる。心に通じるものがあるからだろう。さまざまな人生を精一杯生きている人に出会おうと心から励まされ、「どうかお元気で、お幸せに」と祈らずにはおられない。翌日からスワースモア大学のMcCabe図書館でヘレン・ミアーズ文書を研究。

三月十九日から、コロンビア大学バートラー図書館で一九四四年の太平洋問題調査会の関係文書を調査した後、同大学内のドナルド・キーン・センターを訪問。

三月二十二日、約一か月に及ぶ調査研究を終えて帰国。コピーした史料は三千頁、カメラで撮影した史料は八百頁、筆写した史料は二百頁を超える。これだけの史料を読み込んで整理し、論文にし、単行本として出版するには相当時間がかかるであろう。寸暇を惜しんで研究に専念したい。

一か月の研究調査を終えて感じたことは、研究テーマが『菊と刀』の領域にとどまらない方向に拡大したということである。『菊と刀』の土台となったゴラー論文の情報源などの探求によって、三十年前の研究テーマであった神道、教育勅語の廃止を含む天皇制処理政策、「敵国の哲学の破砕」すなわち「精神的武装解除」を目的とする諸政策との関係を総合的に考察する必要があることが明らかになった。

今、より成熟した視点から占領政策の光と影を改めて見直すことが求められているのではない。三十年前は占領政策の影の部分にのみ目を向け、アメリカの責任を追及することに必死だったが、責任を他に転嫁する一方的な単眼から脱却して主体変容し、『菊と刀』を軸として、連合国軍による対日占領教育政策の光と影を複眼的かつ総合的に見直したい。

三十年の年月を経て、再び占領政策に目を向けるように導かれた人生の不思議さを感じる。膨大な史料を目の前にして身震いしている。研究の再スタートを切った、これからの私の真価が問われる正念場だ。できるだけ客観的な実証的研究を心がけたい。

ヴァイニング夫人の機密文書

こうして始まった在外文書調査研究の旅。二〇一二年から毎年レンタカーで年間一万キロ以上、全米の大学や図書館を駆けめぐり、各地で保管されている史料の調査を行いつつ、現在の日本をめぐる「歴史認識問題」についても調査を重ねてきた。

二〇一四年三月のアメリカでの調査研究の際は、「従軍慰安婦」をめぐる河野官房長官談話の検証を政府が行うことが明らかになったため、ワシントンにある米国立公文書館で「従軍慰安婦」に関する史料を調査したほか、ロサンゼルスやニューヨークにある慰安婦の石碑に関連する現地調査を行い、カリフォルニア州を中心に広がっている日本人の子供に対するいじめの実態などについて広く調査することにした。

国立公文書館では、日本国憲法第二十四条の草案を書いたベアラ・シロタ・ゴードンについても調査したが、近い将来同女史の文書が出身大学のミルズ・カレッジで公開予定である (Mills College F. W. Olin Library, special collection & archive, the general manuscript collection, global fund for women collection)。

私が留学していたメリーランド州立大学のフォーンベイク図書館のプランゲ・コレクション



1980年、マッカーサー記念館で開催された日本占領シンポジウムにて
ヴァイニング夫人（後列左から3人目）と面会。右端が筆者

書に指定され、厳しい制限が課せられており、コピーや写真撮影はもとより、メモすることすら許可されなかった。記憶術をマスターしておけば、こんなときに役立ったかもしれないが、とにかく二人で分担して、一行残らず目を通した。残念ながら活字にすることも許されていないので、読者に報告できないが、皇室に関する機密情報なので致し方あるまい。

情報公開の時代にわざわざ車でアメリカの大学を訪れる必要があるのかと尋ねる人もいるが、このような機密文書は実際にこの図書館を訪ねなければ見ることはできないのである。どのような文書が含まれているかを知りたい

ンに、同大学のマリーリン・マイヤー名誉教授のオーラル・ヒストリーが所蔵されており、この中に同女史やヘレン・ミアーズとのインタビューが含まれていることが分かった。

三月九日、ワシントンDCを出発し、車でペンシルベニア州のフィラデルフィアを通過して、スワースモア大学に到着。美しいキャンパスに改めて感動。

ここでヘレン・ミアーズ文書をすべてスキャンして私のパソコンに送ったが、容量が大きすぎて、パソコンが故障してしまった。それでスキャンを断念し、妻と手分けして、私が全体の三分の二をコピーし、妻が三分の一をカメラで撮影した。

米英での調査研究は基本的に研究者一人に一度に史料箱一箱しか出してくれないため、妻と文字通り二人三脚で、一箱ずつを同時に作業できる有難さを改めて痛感した。「長期間、外国で二人でホテル住まいとは羨ましいね」と人は言うが、実際はそんな甘いものではない。休憩もしないで丸一日、コピーと写真撮影に明け暮れるので、夕刻にホテルに戻るとバタンキューで寝てしまうという、今までの研究生活で経験したことのない過酷な日々なのである。長時間の車の運転も含めて、相当の体力と気力が必要とする。六十代にしては気力も体力も充実していることに感謝して、今できる調査研究に二人で全力投球したいと思っている。

三月十二日、ハバフォード大学（Haverford University）図書館クエーカー文庫で、今上天皇の少年時代に英語の家庭教師を務めたヴァイニング夫人の文書を調査した。全三十九箱中、十二箱は機密文

方は、ハバフォード大学図書館特別コレクションの“Finding Aid for the ELIZABETH GRAY VINING PAPERS, 1897-1989”を参照してほしい。

最も注目されるのは、昭和天皇とマッカーサーとの第一回会見記録である。ヴァイニング夫人がマッカーサーと面会して、その第一回会見の模様について聞いたことを、帰宅後、記憶が鮮明なうちに日記に書き留めたもので、エリザベス・グレイ・ヴァイニン^グ、^{ハバ}フォード天皇とわたし』（山本書店）に、その日記が次のように引用されている。

「わたしは少し強く押してみたんだが、戦争にたいする責任を取る気があるのかと質すと、天皇はこう言われた。『お答えする前に一言いわせていただきたい。閣下がわたしをどう扱おうとそれは構わない。わたしはそれを甘んじて受ける。絞首刑にしてもかまわない。ただわたしは戦争を望んだことは一度もなかった。一つにはわれわれが勝てるなどわたしは考えなかったからだ。それにもましてわたしは軍拡派を好まなかったし、信用していなかった。戦争を阻止するためにわたしにできることはした』」。

さらに、香淳皇后と美智子皇后、今上天皇の書簡や、マッカーサーの面会の際の会話の逐語的記録および面会のための小泉信三らとの準備についての記録などが含まれている。

ハバフォード大学に到着したとき、妻が次のような詩を書いた。

雨のハバフォード大学で見たものは何？

それは あなたの無心の働き

内からの衝動で動く まっすぐな純真な働き

何の邪心もない

何の計らいもない

無心の働き

車の荷台から資料を取り出そうとする

後ろ姿を見たとき

この大学に来るまでの

緻密^{ちみつ}な準備を感じて

私は何のお役にも立てず

一人でこの人生を引っ張ってきたのだなと

涙が出そうだった

その後ろ姿に
父を感じた

三月十四日、車でニューヨークに移動し、前年に引き続き、国連本部で開催された国連女性地位委員会の会議の二つの関連イベントに参加。

三月十六日、飛行機でロサンゼルスに移動し、大学同期の友人に四十年ぶりに再会。顔に面影が残っているが、姿はすっかり好々爺こうこうやに変貌へんぼう。四十年の歳月の重みを感じて感無量。一文無しになったどん底の生活から見事に立ち直った苦労話を聞き、日本から遠く離れた地で一人、思いも寄らぬ人生を生きてきた友がいることを知り、言葉が出なかった。しかし、今は不動産業者として立派に成功している。大したものだ。

旅先での出会い

戦後七十年の節目を迎えた二〇一五年八月の調査では、バンクーバー、トロント、オタワを経て、米ニューヨーク州にあるコーネル大学までレンタカーで約二千キロ移動。ナイアガラ滝の橋を通ってトロントに戻り、「トロント正論の会」の発足記念講演後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で研究した。

各地で日系人の方々と懇談し、カナダにも日系人に対するいじめや嫌がらせが広がっていることを知り、カナダに単身で留学している高校生から具体的ないじめ事例をヒアリングした。アメリカで同様の調査を行った際、話を聞いた高校生は全員親と同居していたが、カナダには親元を離れて一人で留学している高校生が少なくないことを知った。「いじめられても相談する人がいないので不安だ。いざというとき誰が守ってくれるのか」と心配そうに訴えるので、「大丈夫。いつでもメールで私に連絡しなさい」と伝えたが、このような高校生が多数いることを私たちは決して忘れてはならないと思った。

ブリティッシュ・コロンビア大学とカナダ国立公文書館では、GHQの占領政策に大きな影響を与えたカナダの外交官、ノーマンの関係文書（遺書を含む）を調査。コーネル大学では

「南京大虐殺」を世界に広め、東京裁判にも影響を与えたハロルド・J・ティンパリー、UCLAではウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム(WGIP)を計画し実行したブラッドフォード・スミスについて研究した。

この旅でもさまざまな出会いがあった。まずバンクーバーに到着後、ブリティッシュ・コロンビア大学に直行したが、妻とバスに乗るとコインでしか料金を支払えないという。紙幣しか持ち合わせがないため困っていたら、乗客の一人が「コインを持っている人はいませんか?」と車内に呼びかけてくれた。八十歳くらいの老女が立ち上がり、一・七五ドルのシニアパスを二枚取り出し、「これで二人を乗せてあげて」と運転手に頼んでくれた。ぶつぎらばうな運転手は了承し、無事に乗ることができた。

妻が紙幣でお返ししようとする、老女は「結構よ」と言った。それでも「感謝の気持ちです」とお渡しすると、おつりを持ってきた。新しい印伝の携帯ストラップを「あなたの日本人への愛の思い出に!」と言いプレゼントした。バスから降りても投げキッスをして私たちを見送ってくれた。素敵で粋なカナダ女性であった。

ロサンゼルスで出会った九十七歳の浅井菊次さんは、静かで柔らかな物腰であるが、秘められたパワーと生き方に深く感動させられた。奥様は三十年以上前に亡くなられているが、孤独感や老人臭さがまったく感じられない「永遠の青年」である。月刊誌『致知』の読者の

集まりである木鶏クラブのロサンゼルス支部を立ち上げた代表者で、この二〇一五年八月の渡米の機会に同支部の結成二周年記念講演会に招かれた縁から、ロサンゼルスを訪れるたびにお会いするようになった。

浅井さんは「おはよう! 浅井青年!」と笑顔で自分に挨拶してから一日を始めるのだという。以前、靖国神社崇敬奉賛会主催の講演会で茶道裏千家の千玄室前家元に若さの秘訣は何かと尋ねたところ、「毎日、鏡に映った笑顔の自分に『おはようございます』と挨拶することですよ」という答えが返ってきたことを思い出した。

二十年後には、五十代、六十代を独り身で過ごす人が過半数を超える時代が到来するが、そういう孤独な高齢社会を「寂しく」ではなく、心から感謝して生きている人がいた。浅井さんに出会って、かつて私とのテレビ対談で作家の草柳大蔵氏が、俳人の飯田蛇笏が「誰彼も非ず一天自尊の秋」と詠んだ晩年の境地を「死にがい」と表現したことを思い出した。浅井さんとの感動的な出会いを、妻が次のような詩にした。

「ありがとう」の原点

朝 台所に立つと 思い出す あの方の言葉

朝起きて 鏡に映る自分に「ありがとう」
生かされていることへの「ありがとう」
自分でコーヒーをいれて「ありがとう」

そのような心で朝を迎える人

九十代を半ば過ぎ

背筋を伸ばして

いつも優しい満面の笑みのあの方

あの方にお会いできてよかった

あの方の「ありがとう」は「ありがとう」の原点

さあ 私も素朴に淡々と「ありがとう」の原点に立とう

戦後七十年を経てもなお、慰安婦問題などで中韓との対立が激化しているが、旅先で出会う人々との出会いは、そのような民族的対立を超えている。序章の締めくくりにもう一つ、妻の詩を紹介したい。

出会い

韓国から留学しているという貴女
バイトをしながら学んでいる貴女
どうぞ このアメリカでの学びが
貴女の人生にとって充実したものでありますように！

“ジャパニーズ？”と尋ねた貴女

“私はチャイニーズ”と言った貴女

レストランで

私たちの担当ではないのに

ちよつとした合間に

何度も 何度も 私たちの席へ来て話しかけた貴女

席を立ったとき

私は貴女を探して

私たちはハグをした

コリアン チャイニーズ ジャパニーズ

このアメリカの地で

一瞬だけ 出会った私たち

私の心のキャンバスに

温かい 大きな円が描かれた

第一章 「伝統的軍国主義」という共同幻想